



さいたま市立与野南小学校 【児童数】計374名
電話 831-0157



劣等感を前向きにとらえ成長につなげる

校長 土屋 智樹

新年度が始まって1か月が過ぎようとしています。多くの子どもたちは、順調に新学年のスタートを切って、生き生きとした姿で毎日を過ごしています。例えば、25日（金）に行われた1年生を迎える会。前年度の代表委員の児童が中心となって会を進め、花のアーチで1年生を温かく迎え入れ、上級生が歌を歌ったり、プレゼントを贈ったりして1年生を歓迎しました。また、教室では日々、一生懸命学びに向かう子どもたちの姿があります。新学年が始まったという空気感に教室が包まれて、新鮮な気持ちで学んでいる子どもたちの様子が見て取れます。その他にも、責任ある役を引き受けようと、代表委員や委員長、クラブ長などに進んで立候補し、新しいことに挑戦しようとする児童の姿もあります。

その一方で、気になることもあります。例えば、前向きに学習に取り組んでいない児童。課題とは関係のないことをしたり、おしゃべりに夢中になったりしてしまうのは、その子にとって、授業が魅力的に思えないのかもしれませんが、教える私たち教師は、子どもたちの反応を見ながら教えるのですが、自身の教え方を振り返り、常に授業改善を行っていきます。しかしながら、教師の教え方の問題とは別に、学びそのものに興味がないように見える児童もいます。その多くは、何事にも前向きになれず、自分に自信がなさそうに見えます。なぜ、そのように見えてしまうのか。それは、自己肯定感の低さが関係しているのではないかと考えています。

皆さんも知っての通り、自己肯定感とは、ありのままの自分を肯定する感情のことです。他者と比較するのではなく、自分自身が今の自分を認め尊重することで生まれる感覚であり、物事を前に進めるための原動力になります。自己肯定感が低くなってしまう原因として、人からの過度な期待、他者との比較、過去の失敗経験などが挙げられると思います。これにより、自分の価値が感じづらくなり、不安感が大きくなったり、他人に対して強い劣等感を抱きやすくなる恐れが出てきます。子どもが、「自分にはどうせ無理だから」という言葉を繰り返すようになったら、強い劣等感が生じているかもしれません。そのような姿を見たらやはり心配になります。

では、子どもたちが劣等感を持って苦しんでいると感じたら、私たち大人はどんなことができるのでしょうか。まずは、子どものありのままの姿を受け入れて、無条件に信頼し、態度で示すことが大切です。そのような気持ちをほぐしていくのは、時間がかかり、忍耐が必要だと思いますが、やはり私たち大人の役目だと思ってやるしかありません。それと同時に、子どもの向き合い方として、①子どもの良いところを褒める。他人と比べるのではなく、頑張っていること、小さな進歩も認める②子どもの話をよく聴き、対等のコミュニケーションをとる③失敗しても許容し、挑戦したことがとても価値のあることだと伝える の3つが大切だと考えます。子どもが、自分のことを大切にしてくれていると感じることができれば、その自信をエネルギーに変えて、いつかはきっと前向きに物事をとらえるようになるはずです。

子どもだけでなく、私たち大人も、理想と現実のギャップを感じたり、人と比べ自分は劣っていると思ったりした経験はあると思います。アドラー心理学では、「誰しものがそのような感覚を持つもので、劣等感があるからこそ人は努力しようと思うことができる」と劣等感を肯定的に捉えています。しかし、それが悪い方向に働いて劣等感が強くなりすぎると、やがては自分にとって嫌な現実からの逃避というマインドに変わってゆくのだと思います。誰しものが持つ劣等感を前向きにとらえ、自分なりに努力し、成長していける、そんな子どもたちを私たちは育てていきたいと思っています。